光源氏の一生

―贖罪と鎮魂、そして出家まで―

武原弘

一

源氏と藤壺の密通について、自身二人の罪の意識の稀薄さが指摘されている。[注(1)] 相即的に問われるのは、そもそも二人の罪とは何か、その本質的意味についてである。密通という用語による規定そのものが適当かどうか危ぶまれるほどに現代倫理とはかけ離れている二人の「もののまぎれ」の「罪」は、それほど自明的ではなく、すでに諸先学によってさまざまに論考されてきている。[注(2)] それらの諸論に学びつつ、小論は源氏と藤壺の罪の問題を『源氏物語』第一部と第二部の基底に一貫する主題とみなし、それが源氏の一生をどう支配し、あるいはどのように領導するものであったかについて考察しようとするものである。第一部第二部全体の作品主題あるいは構想の展開過程に即して、この問題を再吟味したいのである。

源氏における罪の意識のはじまりは、はやい。「若紫」巻初頭部に叙せられる次の文章に注目してみよう。

わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき、思しつづけて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、（下略）（若紫、(1)―二八六頁）

少女紫の上を垣間見ていっそう募る藤壺への恋情を抑えながら、源氏は僧都の坊を訪ね、法話を聞く。内界に卒然と広がる罪の意識。ここでの「罪」が、すでにはやくあった二人の密通の事実を指す叙述であると、にわかには断定しがたい。源氏と藤壺の密会が物語にはじめて叙せられるのはこれより後の条で、そこに「宮もあさましかりしを出づるだに」「さてだにやみなむ、と深う思したるに」（若紫、(1)―三〇五頁）との描写があり、より以前の密会を暗示するのと符号させる読みは、当たっていよう。いずれにもせよ、源氏はいま「恐ろし」い「罪」意識におののき、藤壺への「あぢきなき」恋を生涯の苦悩として負い、「後の世」にまで報い及ぼうそれを逃れて、いますぐに出家してしまいたい、と思念しているのである。

物語の作者は、ここで源氏の一生の軌跡―その生の根基をいちはやく措定して示そうとしているのではないだろうか。すなわち、源氏の生涯は、決定的に藤壺への恋に領導されるものなのであるが、（一）その恋は、仏法に照らされて恐ろしい罪業であること。（二）

その「あぢきなき」恋は、源氏の生涯の苦悩となること。（三）のみならず、それは来世にも及ぶ罪業であるゆえに、源氏には出家滅罪の生活が願望されること。以降に辿られる源氏の生の軌跡は、ひっきょうするに、右の三点を結んで線太く引き進められることになろうというのである。

右について、いま少し詳考を施してみたい。

二

（一）について。源氏は藤壺への愛執を「罪」として意識するが、その意識は僧都による「世の常なき御物語、後の世のこと」（(1)―二八六頁）に関する説教に触発されたものである点に、まず留意しておこう。ここでの源氏の「罪」が、宗教（仏教）上のものであることが知られる。多屋頼俊氏は、「恐しき宿業とゆう意味」での「宿世の罪」といわれている。[注(3)] この物語における「宿世」の意味についても、すでに諸家による論考が積み重ねられているが、基本的には、井上光貞氏の説に従って「人間の運命は過去の所業の累積の上に無限に輪転している」「自己の力ではいかんともなしがたい」因縁、と解される。[注(4)]「若紫」巻における源氏の「罪」意識が、どこまで深く「宿世の罪」に到達していたかは疑問とされてよいが、彼ははやくも自らの意志や力によってはどうにも制禦できない、前世からの定めとしての罪障を身に受けていたのである。源氏は藤壺に恋をし、ついには密通の罪を犯した、と釈するに当らず、いうべくんばはじめに罪があった、彼は罪とともに生まれ、それを生き果たすべく運命づけられていた、と評すべきなのである。深読みを恐れずにいえば、物語にほとんどプロセスを欠く源氏と藤壺の密通事件描写は、上述のごとき罪の宿世にある源氏原像造型のための、作者によるはやい計画だったのではあるまいか。

密通のもう一人の当事者藤壺の認識は、もっと切実で、深い。ことの直後から、彼女は己が「心うき身」（若紫、(1)―三〇七頁）を痛嘆する。懐妊の事実に気づいてからはなおさらのこと、彼女は源氏との「あさましき御宿世」「のがれがたかりける御宿世」を思い識らされて、深刻な不安と苦悩を常住のものとする。桐壺帝を裏ぎり、世人を欺いて、藤壺は不義の皇子を出産するが（紅葉賀）、なおも止まない源氏の愛執の激しさに、彼女はまたも「いと心うく、宿世のほど思し知られて」（賢木、(2)―一〇三頁）いっそう深い苦悩に身もだえる。ここでの「宿世」に触れて、『全集』の頭注が「自己の意思を超える運命の力と考えずにはいられない」[注(5)] 藤壺の思念を釈しているのは、いかにも至当である。かくして、源氏は「この世ならぬ罪となりはべりぬべき」（同、一〇四頁）わが身の罪障に思いを及ぼし、対する藤壺もまた「背きなむ」（同、一〇六頁）と、出家を決意する。

みてきたごとく、源氏と藤壺は「宿世」の因縁によって結ばれることで、即時的に深い罪障に定められた。当時の仏教観によると、この罪障が来世における往生の妨げになると考えられていたらしいことは、源氏がくり返し思念する「後の世のいみじかる」「この世ならぬ罪」（いずれも前掲）「ほだし」（賢木、(2)―一〇四頁）から確認されるとして、「罪」以後の二人が、これとどう戦い、これをどう解脱しようとするかを問うのがこの物語の初発の主題であった

と考えることが許されよう。

（二）について。源氏は藤壺への愛執を「あぢきなきこと」と知り尽くしており、ために、それを生涯の苦悩としなくてはならない必然に気づいている。竹内美智子氏の卓説どおり、「あぢきなし」は、「その現実が、自分の力ではどうにもならないものとして意識されてくると、その嘆きも、失意・絶望・あきらめなどの重苦しい無力感をただよわせる」[注(6)]そのような意を表わす語である。氏はさらに、「所詮そこからのがれることは出来ない」「業」として、源氏がこれを「当時者の側」から捉えていることを表現しているともいう。源氏の宿業を指摘されているのである。

藤壺への恋が宿世の罪＝罪障に定められている以上、それに由来する源氏の苦悩が生涯に止むときがないのも道理ではある。皇子（冷泉帝）誕生のときの底知れない恐懼（紅葉賀）、惑乱狂気寸前まで奔騰する激しい情念との戦い（賢木）、退京沈倫の憂き目（須磨）、などを経つつ見隠する源氏の罪障とそれによる苦悩は、後年の栄華の光でその影を消し去られたかに見えながら、物語第二部における女三宮の悲劇となって転生顕現する。それはまさしく、「わが世とともに恐ろしと思ひし事の報」（柏木、(4)—二八九頁）なのではあろう。

（三）について。上述のごとく、源氏と藤壺の宿世の罪は、深刻な苦悩を常住のものとしなくてはならない、生涯に報いるものであったが、ことはそれのみに終息はしないとするのがこの物語の「宿世」思想であると考えられるのである。前にも触れたように、藤壺との罪障を思う苦悩のなかで、源氏は「後の世のいみじかるべき」（前掲）を思念し、さらには「もの心細く、なぞや」（賢木、(2)—一〇五頁）と、強い出家願望を抱くようになる。出家による罪障消滅につとめ、来世への報いを防ぐためであることはいうまでもない。読み知られるように、この思念は、藤壺にとってはさらに切実なものであった。皇子までなした罪障の重さに苦悩し、「ひたみちに思し立つこともや」と案じられる源氏に先んじて、彼女は決然と出家を遂げる（賢木、(2)—一〇六～一一四頁）。その基底には、「わが身はなきになしても春宮の御世をたひらかにおはしまさば」との深甚の母性愛が貫かれていたのは確実として、さらには「我にその罪を軽めてゆるしたまへと、仏を念じきこえたまふ」滅罪の強い信仰もはたらいていた（賢木、(2)—一三〇頁）。生の根源に共通の罪障を負うて生まれきた源氏と藤壺にとって、罪障軽減さらには消去のための出家こそが、互いの生の意味であり、目的なのである。極論すれば、源氏と藤壺は、出家するために生まれ、生きたのである。

源氏は、はやい時期から出家願望を抱き、実際には遂行に至らないまま発心をくり返す。阿部秋生氏の精確な作品分析によると、最初の発心の時期は葵の上の死後（葵）、将来に期する強い決意となるのは故院崩御後、藤壺の出家の直後（賢木）であるとされる。[注(7)]以降、源氏のもう一つの「宿世」に導かれてする栄耀栄華の極みにあっても、彼は「なほ世を背きなん」（絵合、(2)—三八三頁）「今は本意も遂げなん」（藤裏葉、(3)—四四五頁）との出家志向を反芻する。最晩年における遂行まで（宿木）、出家に至る彼の道程は確かに遠かったが、それまで持続した志のほどは生涯に一貫して不変のものであったと確認することができるのである。

源氏の出家を遠く遅らせた最大の原因は、近親者とりわけ紫の上に対する深い愛執であった。出家願望を抱くたびごとに、初期の紫の上には「昼の面影心にかかりて」（若紫、(1)―二八六頁）、「さうざうしくてものしたまふらむありさま」（葵、(2)―四四頁）を思い、中期の彼女には「対の上の御ありさまの見棄てがたき」（藤裏葉、(3)―四四五頁）を心にかけ、後年には「とまりてさうざうしくおぼえたまひ、ある世に変わらむ御ありさまのうしろめたさ」（若菜下、一五九頁）を述懐して、源氏は出家決行を保留し続ける。鈴木日出男氏が論ずるごとく、「出家すべきだが紫の上の存在ゆえに保留せざるをえないという発想」が、やがて「源氏固有の発想として繰り返され、類型化していく」ので、そこにも源氏の生涯にわたる「無類の憂愁」がかかえこまれていたのであろう。[注(8)] 思うに、藤壺の形代としての紫の上の存在とは、いわば藤壺の宿世の罪障の転移存在である。紫の上への愛執を抱き続けながら、同時に藤壺との罪障消去のための出家を志向する源氏の自家撞着は、決して解消されることがないのである。

以上、「若紫」巻の叙述を中心として、源氏における初発の罪意識について考察を施した。以降の物語において、彼は藤壺の宿世の罪障とどう対応し、これをどう生きぬいていくか。さらに追考してみたい。

三

藤壺の出家が、東宮の安泰のためを第一義としつつ、同時に源氏との宿世の罪障の消滅のためでもあったことについては、前節で触れておいた。「我にその罪を軽めてゆるしたまへと、仏を念じきこえたまふ」（前掲）その「罪」とは、厳密には東宮にかかるそれを指しているが、日向一雅氏が卓説するとおり、「我に」とある叙述で「東宮の負う罪障が本来藤壺自身に属し、かの女が負わねばならないものとして自覚されている」のを確認することができるので、その「出家の本質は贖罪にあった」[注(9)] と解して然るべきであろう。

いま一方の源氏において、贖罪の行為はいかになされるか。藤壺の突然の出家に、源氏は心に大きな打撃を受け、「独りうち臥したまひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるる」（賢木、(2)―一二六頁）と、自分も出家を考えている。罪障は共有されなくてはならず、その意味で二人はまさしく「運命共同体」（森一郎氏）[注(10)] なのであるが、東宮の後見を自覚して、源氏は出家を保留する。が、贖われるべき宿世の罪障はなお彼の前にあり、出家とは別の形での代償行為を求める冥々の力が、やがて彼を須磨流謫へと導く。

源氏の須磨退去の直接の契機が朧月夜との密通の発覚にあったことは、もはやいうをまたない。が、それはあくまでも物語における表層世界の事象であって、内在化されたより本質的な原因は、藤壺との密通による宿世の罪障、その贖いのためであったことが認められている。出発の前、源氏は藤壺に対面していう。

かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世にだに事なくおはしまさば、（須磨、(2)―一七一頁）

「惜しげなき身は」以下が、藤壺の出家動機を語る叙述（前掲）と

同趣なのも、源氏の須磨退去が、藤壺の出家に応じ相当するものであることを示す。「思ふたまへあはすることの一ふし」＝密通の罪を、「空も恐ろしう」自覚するのは、さきの「若紫」巻、あるいは後の「若菜下」「柏木」諸巻のばあいと同様、仏天を恐れる源氏の意識に深くつながっていよう。実際、須磨での源氏の生活は、日々仏道精進に明け暮れるものであった。「かく、うき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて」（須磨、(2)―一八五頁）、「『釈迦牟尼仏弟子』と名のりて、ゆるやかに誦みたまへる」（同、(2)―一九二頁）ほかの叙述を精読して、阿部秋生氏が「源氏は、須磨では、念誦・誦経等の勤行によって仏の加護を頼み、今生に生きている間に、罪障を消すことを期している」その「仏道修行」のありさまを評論していて、[注112] 多くの教示を受ける。

「須磨」巻から、「明石」巻にかけて、突然の大暴風雨襲来のことが描かれ、源氏は生命も危うい苦難に遭う(2)―二〇九～二一七頁）。ここに故院の霊が現われ、あるいは住吉明神の神意がはたらいて、源氏は導かれて明石へ逃がれ、生涯最大の危機を脱するという物語の展開が辿られるのは（(2)―二一八～二二四頁）、確かに柳井滋氏の考説に詳しい「霊験譚との交渉」にその由来があろう。[注113] かの地において、源氏は明石の君と出会い、契りを結ぶが、その前後の経緯を通して、彼の運勢がこれまでの暗を転じて明へと開かれつつあるのが予感される。

横さまの罪に当りて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。（中略）都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかの事なくて月日を経るに、（下略）（明石、(2)―二三六頁）

明石の君との結婚を前に、源氏があらためて藤壺との宿世の罪障を回顧のうちにおいているのが注目される。この文脈について、『全集』の頭注では、源氏は「須磨への引退を、藤壺との罪の報いと解していたが、いま新しく、入道の娘との宿縁がその一因であることに思いあたる」ので、「ここで源氏の受難と贖罪の時期は完全に終わった」と解している。[注113] 高橋亨氏の考論でも、「源氏にとって須磨を去ることは、贖罪が成ったこと、つまり、明石へ移ることによって実は『もの報い』としての須磨退去は終結したことを意味する」とされ、[注114] これを肯んずる日向氏の論究（前出）[注115] にも、併せ学ぶことができる。贖罪は完全に成ったのか否か。それこそが小論の追究課題なのであるが、詳考は次節に譲るとして、この辺りに源氏の運命の一大転機を確認する読解は必要にして、かつ十分正当なのである。再び物語に即してみると、朝廷でも「物のさとし」が続くのを恐れた朱雀帝は、弘徽殿大后の反対をおしきって、源氏を都に召還する（明石、(2)―二四一～二五二頁）。再び政界に返り咲いた彼は、はやい昇進を重ね、藤壺と共謀して権勢拡大をはかるなど、まさに「貧婪に権勢街道を進もうとする」（秋山虔氏）[注116] ので、「澪標」巻以後の源氏像の顕著な変貌を認定するのが通説となっている。その街道の行きつくところ、そこに壮大な六条院の偉容が見え、あるいは前例のない準太上天皇という栄光の座が輝くことになるのである。

思うに、藤壺との密通は、宿世の罪障として源氏の生を苛酷な苦悩苦難に定めるものであったが、それは同時に不義の子冷泉帝を結

果することで、源氏を無類の栄華へおし上げていくものでもあった。出生してすぐ、高麗の相人の予言に告知された「国の親となりて、帝王の上なき位」（桐壺、(1)―一一六頁）そのものではないが（それは、「乱れ憂ふること」を未然に退けようとした桐壺帝の深慮によって、故意に避けられた）、それに匹敵するほどの栄耀栄華に達した源氏の半生である。罪の宿世と栄華の宿世―背反する二つの宿世が表裏しつつ一つの生を領導するところにこそ、源氏固有の遠い宿世があったと評すべきなのかも知れない。

四

藤壺における出家、源氏における須磨流謫が、宿世の罪障消滅のためのそれぞれの贖罪行為であったことは、みてきたごとく、確実であったろう。しかし、それが完全に終結したと考えるには当らず、むしろ末了のままに不断に持続していたと解すべきではあるまいか。

「薄雲」巻で、重態に陥った藤壺は、出生の秘密を知らない冷泉帝のことを「うしろめたくむすぼほれたることに」（(2)―四三五頁）苦しみながら、ほどなく他界する。ここでの「むすぼほれ」は、後の「手習」巻の浮舟についての描写文にその類例を見るように（(6)―三四二頁）、罪障を晴らしえていない内心の鬱積心理を表現するものと解してよい。続く「朝顔」巻で、藤壺は亡霊となって源氏の夢枕に立ち、次のごとき恨み言を口にする。

漏さじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ。（朝顔、(2)―四八五頁）

右前半部は、源氏が紫の上に藤壺のことを話したのを指している。前に、夜居の僧都が冷泉帝本人に出生の秘密を奏上している（薄雲、(2)―四三九～四四二頁）のを指すとする藤井貞和氏の解は（注17）、前述の藤壺の「むすぼほれ」と矛盾をきたし、従えない。より重要なのは後半部で、藤壺は冥界にあってなお苦患にあえいでいると言う。源氏に対する愛報の罪を帯びたまま、成仏できない状態にある。そして、これを受けとめる源氏の思念にも注意したい。

行ひをしたまひ、よろづ罪軽げなりし御ありさまながら、この一つ事にてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ。（同、(2)―四八六頁）

出家後の藤壺の精進専一にもかかわらず、密通による宿世の罪障は消去されえず、あの世にまで引きずられていることの悲しさを、源氏は深く思う。さらに続く思念。

何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、とぶらひきこえ参うでて、罪にもかはりきこえばや。（同）

「何わざをして」は、文脈上「罪にもかはりきこえばや」にかかる点に留意したい。すなわち、語詞の厳密な意味での「贖罪」（罪を代る）の「行為」（わざ）を、源氏はいま深く思念している。いいかえれば、源氏の贖罪は、須磨流謫の段階で完全には終結していなかったことの証左と読まれる。源氏は何を為すべきか。「とり立てて何わざをもしたまはむは、人咎めきこえつべし」（同）との恐れもあって、いまの彼は「阿弥陀仏を心にかけて、念じ」（同）祈る他を為しえない。が、向後において、源氏のその「何わざ」は形を

変えて必ず為されるであろうその予感は、ここでいかにも喚起的となっている。

冥界で苦しむ人に対する贖罪とは、より正確に、「鎮魂」と呼び改められようか。「朝顔」巻末での故霊出現のあと、源氏による藤壺鎮魂の営みがどのように続けられるかが注意されるのである。

「少女」巻半ばで、前斎宮女御の中宮冊立を強力におしすすめる源氏が、まず注目される。彼は「母宮も後見と譲りきこえたまひしかば」（少女、(3)―二四～二五頁）と、生前の藤壺の意向を盾に世人の反対をおし切り、立后を実現している。梅壺に対する源氏のこうした後見ぶりは、後で六条御息所の死霊が語るように、「中宮の御ことにても、いとうれしくかたじけなし」（若菜下、(4)―一三七頁）と謝する御息所自身への鎮魂の行為であったことは明白なのであるが、それが同時に冷泉帝守護のために苦しんでいる藤壺の故霊への鎮魂のわざでもあったのは確実である。太政大臣に昇進した源氏は、次いで六条院の造営にとりかかる（少女、(3)―七〇～七二頁）。四季の美を総集して華麗な殿堂が「中宮の御旧き宮のほとりを、四町を占めて」（同）壮大に建てられたのは、藤井貞和氏の考説のとおり、「六条御息所の霊魂をなぐさめる」[注18]ためだったからに相違ない。そして、それはまた秋好中宮の里邸としても、この上なく壮麗典雅に造営されなければならなかったと読むのが、小論の立場である。顧るに、「薄雲」巻に、里下がりしてきた養女の女御に恋情を募らせ、源氏が告白めいた訴えかけをする場面がある。「かたじけなくとも、なほこの門ひろげさせたまひて」（2）―四五一頁）と、女御に皇子の誕生を期待する源氏の心意が語られたあと、「はかばかしき方の望みはさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりしがな」（同）と、話題は春秋優劣論へ転じていくが、こうした文脈は、『弄花抄』が解くように「源氏の六条院をつくるべき心ざし」の伏線描写と読みとれよう。やがて皇子を生み、中宮となって栄えるはずの養女梅壺の里邸は、当然のごとく至高完璧のものでなくてはならず、それはまた冷泉帝の御代讃栄の象徴ともなる。中有にあってなお苦しんでいる藤壺の故霊のためにも、いまは「似げなき」（2）―四五四頁）恋情を捨て、その一大計画をすすめなくてはならぬとするのが、ここでの源氏の思量ではなかったろうか。六条院造営はかくして成った、と考えることができる。

「生ける仏の御国」（初音、(3)―一三七頁）と讃えられて完璧を誇る六条院世界ではあったが、物語が第二部に入ると、そこに不幸が忍び寄った。女三宮の突然の降嫁によって、紫の上は深甚の衝撃を受け、出家を切願するようになり、やがて発病する（若菜下、(4)―一五九～二〇三頁）。いささか前後はするが、在位十八年の冷泉帝は、皇子がないまま、譲位する。源氏の失望は深く、「罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじけりける御宿世、口惜しくさうざうしく思せど、人にのたまひあはせぬ事なれば、いぶせくなむ」（若葉下、(4)―一五七～一五八頁）無念に思うが、ここでの「いぶせく」は、前述した藤壺との宿世の罪障に由来する源氏の深い「憂愁」に他ならず、その意味で、源氏の贖罪も鎮魂もなお未了であることが知られるのである。このように憂苦する源氏をさらに極限状況まで追いつめるのが、柏木＝女三宮密通事件であった。やがて不義の子をもっ

た源氏は、次のように思念する。

わが世とともに恐ろしと思ひし事の報なめり。この世にて、かく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや。（柏木、(4)—二八九頁）

因果応報の思想による藤壺事件の甦りである。清水好子氏が高論するように、「若菜上下巻には光源氏が四十年の生涯に経てきた事件や関係した人物がほとんどすべて再登場」するが、「それはもとより過去の最大の事件である藤壺との密通、冷泉帝誕生について問い直すためであった」のである。[注19] 二人の罪障の宿世はいつまでも終結しないことを知らされる。

前掲の源氏の思念叙述後半部について、源氏の罪意識の軽少さがしばしば指摘されるのであるが、小論ではむしろ逆に、罪障に対する彼のより深い認識を語る叙述と読みたい。何故なら、藤壺との密通をまたも「後の世の罪」と結びつけることで、源氏は密通の罪を単に現実的倫理的次元のものとして自覚するのみならず、より以上に宗教的な宿世の罪障として受けとめ続けてきたことが了解されるからである。女三宮事件をその「報い」と悟るのも、彼の深い宿世認識によるのであるのはいうまでもない。

かくて、源氏の半生をささげる贖罪と鎮魂も、因果応報の理のなかでは無為に等しく、藤壺との罪障は源氏の出家による消滅という終結を待つ段階に至っているのである。

五

最愛の紫の上を失って、源氏は深い悲傷の晩年を過ごす（「御法」）。彼は、いよいよ念願の出家を遂げようと決意して、静かにわが生涯を顧みて述べる。

この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず、世のはかなくうきを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔にながらふれば、かくいまはの夕近き末にいみじき事のとぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに、（下略）（幻、(4)—五一一頁）

「人より口惜しき契り」すなわち不幸な運命の連続をいうとき、源氏が最も痛切に想起したのは藤壺との宿命的な恋ではなかったろうか。「世のはかなくうきを知らすべく、仏のおきてたまへる身」すなわち、若年より仏道発心をくり返してきた源氏の苦悩、憂愁の基底には、前述したように、藤壺への抑えかねる恋慕とその罪意識が貫通していた。右の述懐文において、「世のはかなく…身なる」が下文の「宿世のほど」に、また、「それを強ひて…ながらふれば」が同じく「みづからの心の際」にそれぞれ対応する叙述であることを読みおさえたい。ひっきょうするに、源氏は晩年に至ったいま、ようやく定められていた罪障から離れて出家に行きつく自らの「宿世」と、その「宿世」とは裏はらの栄華を貧るこれまでの「心」の「際」とを「見はて」たのである。ここでの短い源氏の述懐に、彼の全生涯の宿命の軌跡が語り尽くされていると考えられる。物語中には、紫の上にも藤壺にも、これと同趣の述懐が語られている。阿部秋生氏が論じているように、それらの述懐は「袋小路に追いつめ

られて」「逃れがたい憂愁」からの逃げ口を「仏法という特異な方法に求め」[注(2)]た平安貴族に対する物語作者の人生解釈、批評であったろう。ここでの物語作者は、そしておそらく読者も、源氏のま近い出家を確かな予感として抱いたであろうし、同時にそれは主人公光源氏の長大な物語の終結への予覚であったはずである。

小論の冒頭に、藤壺との密通にかかる源氏の罪の意識の稀薄が指摘されていることを記述しておいた。その問題では、藤壺も同断に論定されてきている。

物語の表層において、二人の罪意識は確かに稀薄であるかに読まれる場面が、多々ある。密通後、不義の子の誕生に恐懼戦慄しながらも、二人はなおも切なる秘情をこめた和歌の贈答を重ねているし（紅葉賀）、とりわけ、「賢木」巻に叙せられる桐壺院一周忌に際しての贈答には「背信についてのこだわりが少しも見られない」（清水好子氏）。あるいは、須磨下向の前夜、故院陵に参拝した源氏の祈禱に一言の懺悔もないのは（須磨）、読むに了解しにくいものを残す。「澪標」巻以降における源氏と藤壺の政治家への変貌も、そのような両人の罪意識の浅薄さと無関係ではないのかも知れない。他にも同趣に読まれる場面は指摘されるが、いまいちいちの引証は割愛に従いたい。

しかしながら、問題の本質は、物語の深層において把握されなくてはならない。すでに小論が確かめえたように、源氏にも藤壺にも、「罪」に対する不安、苦悩は深く、贖罪から鎮魂さらに出家まで辿られるそれぞれの生涯は、作中であまりに重大切実な語りのなかに置かれているのである。密通した二人が問われたのは、既述のごとく、「宿世の罪障」であった。源氏自身が気づいていたように、「宿世などいふらむものは目に見えぬわざ」（若菜下、(4)―二五四頁）であり、彼がそれを「残りなく見はてて」（前掲）明瞭に自覚することができたのは、最晩年に至ってからであった。藤壺との密通を、父桐壺帝や世間への裏切りとして恐れた当初の源氏の「罪」意識は倫理的罪意識と規定されうるのであるが、それが宗教的罪意識すなわち人間存在の根源に由来する「宿世」の罪障であることへの明確な自覚となるまで、彼には長い人生の道程が必要とされていた。その間、というよりもその当初から、彼は「悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身」（御法、(4)―四九九頁）の自己存在について、容易には悟りえなかったのである。ひっきょうするに、倫理的罪意識から宗教的罪意識への悟入、それが源氏の一生であったと評することができる。しばしば指摘される源氏の罪意識の稀薄さは、右の二つの罪意識の径庭のはかり知れない遠さを描く作者の意図による、と解釈しておそらく不当ではあるまい。

注(1)　野村精一「藤壺の『つみ』について」（昭44・9　『源氏物語の創造』桜楓社刊所収）、今西祐一郎「罪意識の基底」（「国語と国文学」昭48・5）、同「懺悔なき人々」（「文学」昭49・5）、清水好子「光源氏論」（「国語と国文学」昭54・8）など。

注(2)　多屋頼俊『源氏物語の思想』昭27・4　法蔵館、高橋亨「源氏物語における出家と宿世」（「むらさき」第九輯　昭46・6）、日向一雅「光源氏と藤壺の罪をめぐって」（「日本文学」

昭50・6）など。注(1)の諸論文も含め考察する。

注(3) 多屋頼俊「源氏物語における宗教観」（「国文学」昭33・5）、同「源氏物語の罪障意識」（『源氏物語講座第五巻　有精堂刊所収）にも同趣旨の論考があり、参照。

注(4) 井上光貞「源氏物語の仏教」（『源氏物語講座　下巻』東京大学源氏物語研究会編所収）

注(5) 阿部秋生　秋山虔　今井源衛校注『日本古典文学全集　源氏物語二』小学館刊の一〇三頁。

注(6) 竹内美智子「『桐壺巻』冒頭について」（『源氏物語と和歌研究と資料』古代文学論叢第四輯　武蔵野書院刊所収）二〇八頁。

注(7) 阿部秋生『光源氏論　発心と出家』東京大学出版会刊　一〇五～一三三頁。

注(8) 鈴木日出男「光源氏の道心」（『講座源氏物語の世界　第七集』有斐閣刊　二二一頁

注(9) 注(2)の日向論文。

注(10) 森一郎（源氏物語作中人物論』笠間書院刊　三三頁ほか。

注(11) 注(7)の書一三〇頁。

注(12) 柳井滋「源氏物語と霊験譚の交渉」（『源氏物語　研究と資料』古代文学論叢第一輯　武蔵野書院刊所収）一八三～一九〇頁。

注(13) 注(5)の『全集』二の二三六頁。

注(14) 注(2)の高橋論文。

注(15) 注(2)の日向論文。

注(16) 秋山虔「源氏物語の後宮世界」（「解釈と鑑賞」昭34・4）

注(17) 藤井貞和「物語の方法」桜楓社刊、五九頁。

注(18) 藤井貞和「玉鬘」（『源氏物語講座第三巻　有精堂刊　二一六～二一七頁。

注(19) 清水好子「源氏物語の主題と方法」注(12)の書所収。一二六頁。

注(20) 注(7)の書二一八～二一九頁。

なお、本文の引用はすべて注(5)の書によった。